

スモン患者さんの社会生活における本年度の動向

田中千枝子（日本福祉大学社会福祉学部）

二本柳 覚（日本福祉大学スーパービジョン研究センター）

研究要旨

今年度の患者調査介護票より、公表の許可を得られたスモン患者 522 名の生活と福祉・介護状況について把握した。例年と同様、高齢化の進行とともに ADL や活動性の程度・介護や日常の生活場面の緩やかな低下が続き、安定していた生活の満足度にも陰りが見えてきた。一方家族形態は単身および 2 人世帯が 7 割に迫るようになり、ここ 10 年間で主な介護者のうちヘルパーなどのフォーマルな支援者の割合が 2 割から 3 割に増加した。またここ 5 年間の居所は在宅 7 割を切り、時々入院も減り、それらは長期入院・入所に移行した。これはスモン患者さんの生活の場が、時々入院で在宅ケアを維持せず、直接長期入院で介護ニーズを充足する傾向をあらわしている可能性がある。また主な介護者も公的専門職が 35.7% まで上昇してきた。

介護保険の申請率は長らく 5 割前半をキープしていたが、ここ数年は漸増し今年度は 58.7% となっており、80 才以上の高齢者全体の 44.6%（平成 28 年統計）と比較しても高い申請率である。しかし要介護度 4～5 の重度は 17.7% であり、介護保険全体で 21.7% なのに比べ介護度は軽いことが特筆される。一方スモン患者の要支援 1～2 が 34.5% に対して、全体では 28.2% と、スモン患者の障害程度が軽く認定される傾向が続いている。このことは今後介護保険での要支援での施設入所が制限される中で、認定の改善に向けて注目していく必要がある。

実態として福祉・介護サービスの利用が必要とされる状況は増加しているが、在宅でのケアによる自宅生活の継続が成立しがたく、また入所入院サービスのうち、居宅や特養などの公的施設利用に結びつきがたい状況が推察される。その状況が生まれている居所変更の選択に関する検討過程の内実も、スモン患者の制度的特典を生かしたものとなっているのかどうか、今後の実態調査や支援者への周知が重要な研究課題となる。

A. 研究目的

2018 年今年度のスモン患者の介護・福祉サービスの受給状況の現状について、その利用実態を明らかにすると共に、家族を含めた患者の生活の QOL の向上につながるべく社会サービス利用促進に至る知見を得て、その方策を模索することを目的とした。

B. 研究方法

今年度および 1997 年度以降の 19 年間に蓄積された「スモン患者票」の縦断的量的データをもとに分析を

実施した。なお 2018 年度の分析対象患者数は 522 名（男性 141 名 女性 381 名）であった。

（倫理面での配慮）例年面接時に統計的情報の公表に同意の確認出来た患者・家族を対象にする。今年度は 522 名の同意であった。

C. 研究結果

(1) 概況

全体数は 2000 年の 1,149 名をピークに漸減し、ここ数年間は 600 名台で昨年度から 500 名台となった（図 1）。

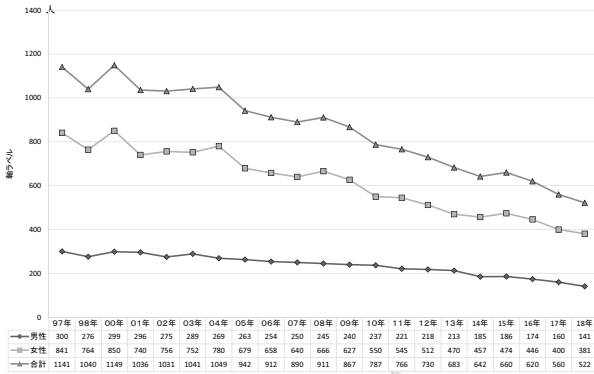


図1 受診者数の推移 (1997~2018年)

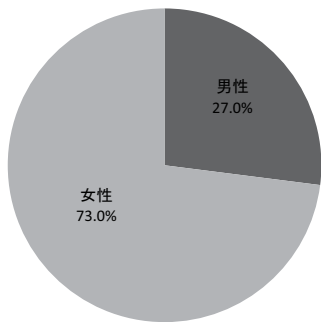


図2 2018年度性別

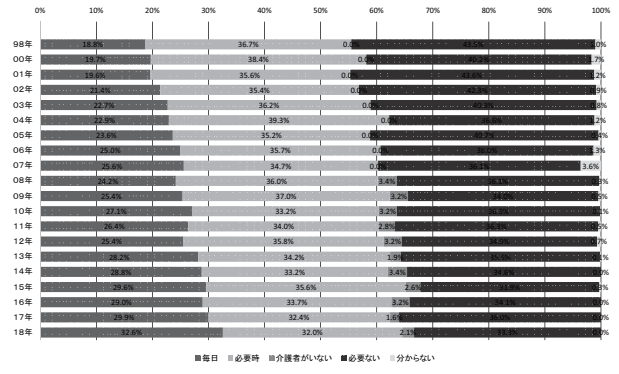


図4 要介護の状況推移

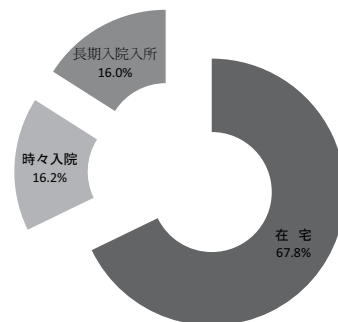


図5 最近5年間の療養状況

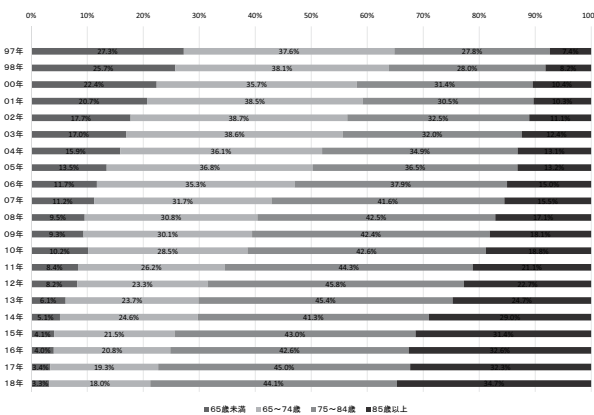


図3 年齢の推移

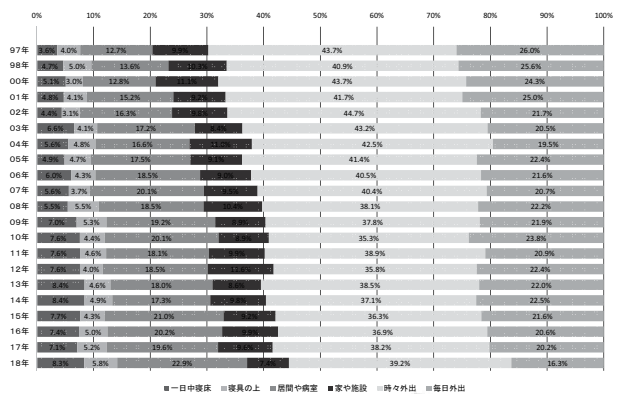


図6 日常の活動性の推移

男女比は数年前より男性がやや減少し3割を切った(図2)。高齢化が進む中で、今年度は平均年齢が82才となった。本年は75才以下の各年齢層が1年に1ポイント程度の減少であるが、85才以下が2ポイント強上昇した代わりに、85才以上が0.3ポイントの減少を見せている(図3)。

(2) 介護程度と生活の場

介護程度は例年介護の必要がないものが4割強から、ここ数年3割台となり今年度は33.3%に減少した。介

護が必要の方はほぼ3割に増加し、また介護者が必要だがいないという事例が散見され、要介護者の生活の場の確保が重要になってきている(図4)。また最近5年間の療養状況では、在宅が7割、時々入院が2割、長期入院入所が1割程度となっていた。しかし今年度では在宅が67.8%と減少し、さらに時々入院が0.4ポイントの減となり、その分長期入院に移行した(図5)。この傾向は生活の場が在宅中心のケア体制が整わずに、介護ニーズを長期入院で充足する傾向をあらわしている可能性がある。

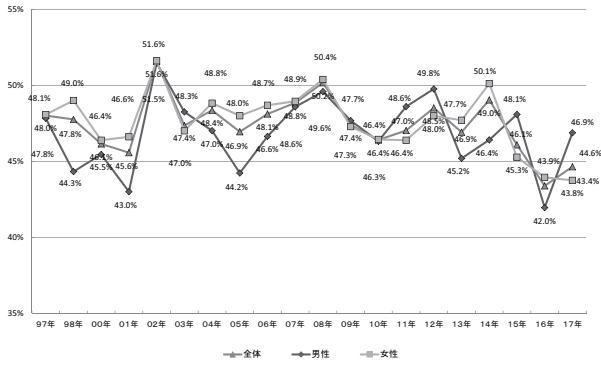


図7 満足度の推移

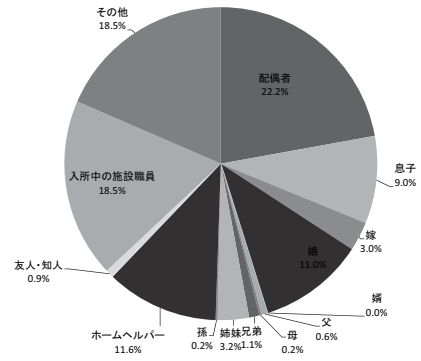


図10 2018年度の主な介護者

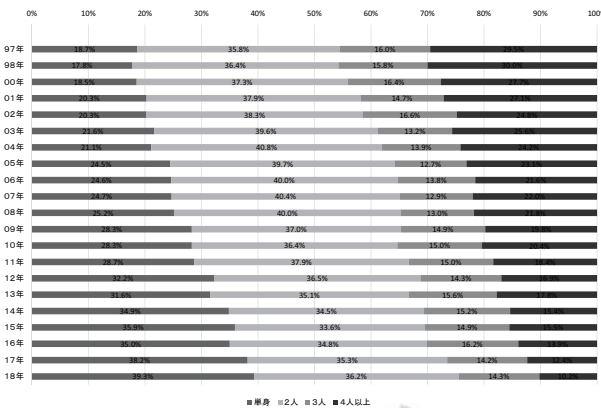


図8 世帯人数推移

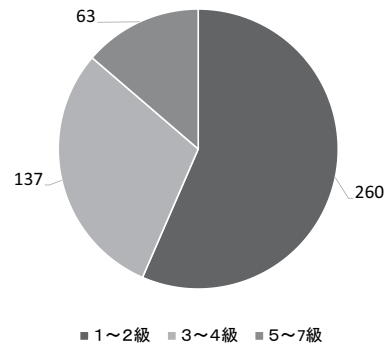


図11 身体障害者手帳取得者

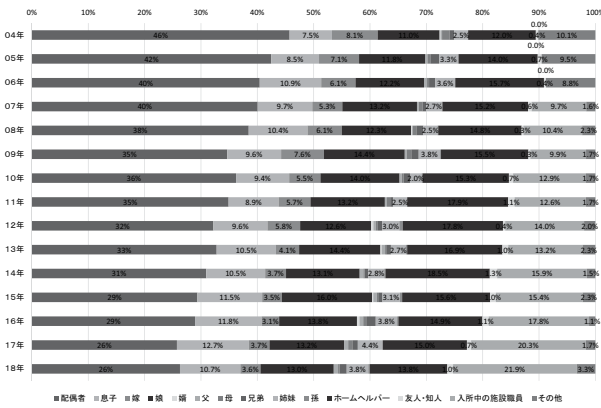


図9 主な介護者推移

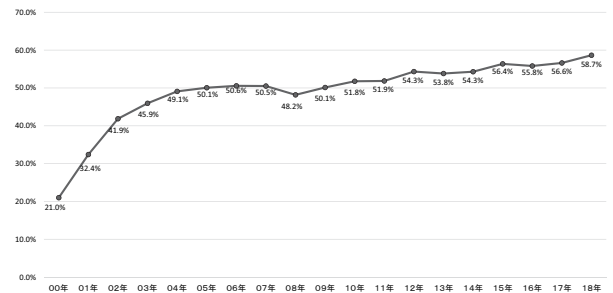


図12 介護保険申請認定者推移

(3) 社会的活動

社会活動や参加について、時々または毎日でも外出をする群は20年前では7割あったものが55.3%まで減少している。1日を寝具上で過ごす群は逆に7.6%から14.1%に増加している(図6)。それに対してくらしの満足度は、15年間4割~5割の幅で安定している。ただし45%の上下で満足度を見てみると、ここ数年は45%の下方傾向になりつつある(図7)。

(4) 家族と介護状況

世帯の形態は19年間で単身世帯が18.7%から今年度38.2%となり、2人世帯を合わせても5割であったものが、はじめて7割となった(図8)。また主な介護者は15年間のデータであるが、配偶者が45.7%から25.7%と漸減し、代わって公的専門職であるヘルパーや施設職員が12%から35.3%となっており、知人友人を含めて血縁のない主な介護者との繋がりが36.0%となっていることが特筆される(図9)(図10)。

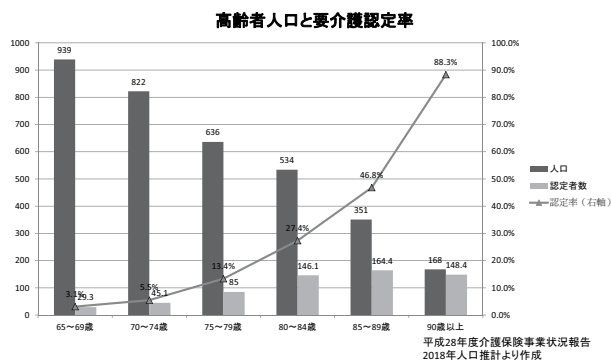


図 13 高齢者人口と要介護認定率

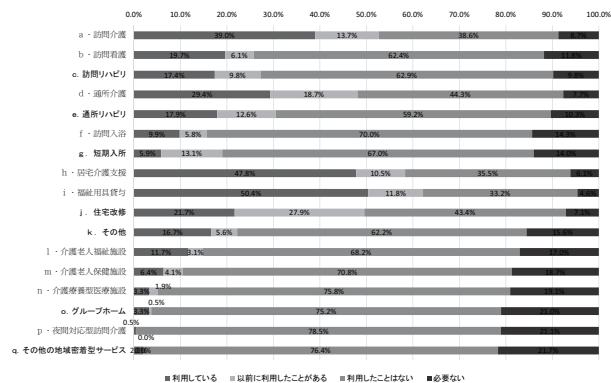
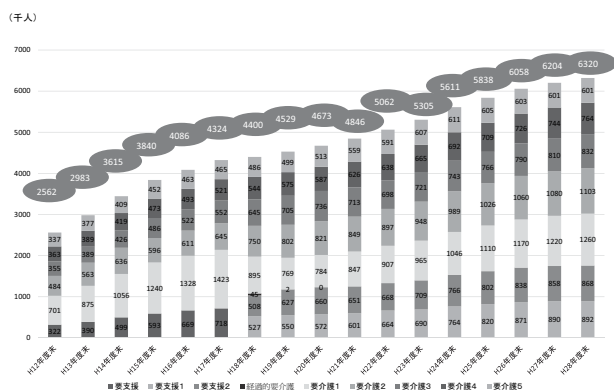


図 16 介護保険サービス利用経験



(出典:介護保険事業状況報告 平成28年度)

図 14 要介護度別認定者数の推移



図 17 福祉サービス利用の経験

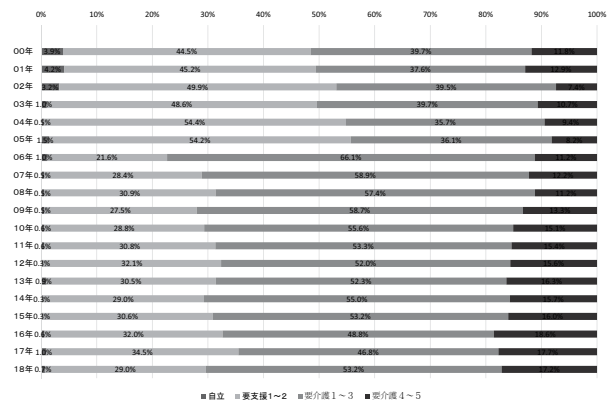


図 15 要介護度の推移

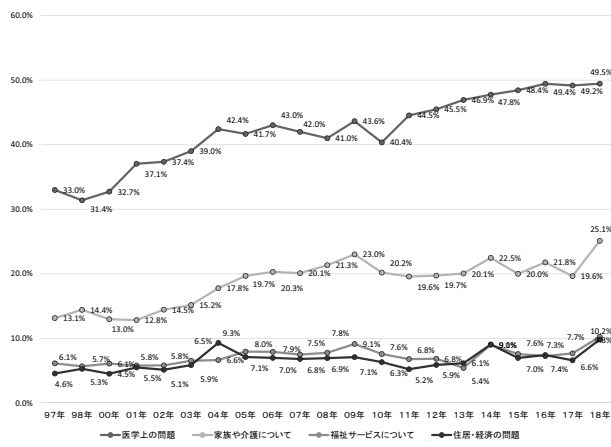


図 18 問題領域の推移

(5) 身体障害者手帳と介護保険申請

身体障害者手帳の所持率は例年通り9割であり、もともと発症後まもなくとった方が多い。高齢化により新たにまた再申請をしたと推察できるケースも毎年10人前後見受けられる。等級は1～2級の重度障害が今年度は54.8%である(図11)。一方スモン患者の介護保険の申請率は当初の2～3割からここ15年間は5割をキープし今年度は56.6%と漸増している(図12)。

要介護度については4～5の重度が17.7%であり、それに対して80才～85才の高齢者に対する介護保険全体では21.7%である(図13)。またスモン患者の要支援1～2は34.5%に対して、80才～85才の高齢者全体では28.2%(図14)と、スモン患者の障害程度が軽く認定される傾向が続いている(図15)。このことは今後介護保険での要支援での施設入所が制限される中で、改善に向けて注目していく必要がある。

(6) 介護・福祉サービス受給状況

介護保険ではホームヘルプが 54.7%、福祉用具が 64.3%、住宅改修が 49.8%と高率であり、通所系サービスではデイサービスが 44.2%、通所リハビリが 26.7%であった。しかし全体のどの数字とも昨年度より微減傾向が見える。また利用したい在宅サービスの利用率は介護保険全体に比して高くない。また介護保険の入所施設利用は特養ホームで 3 年前より 10%を越えたものの、昨年 9.3%、今年も 9.1%と漸減傾向が気付きである (図 16)。また福祉制度として、スモン関連制度は管理手当 8 割、鍼灸公費負担が以前利用も含めて 54.5%と比較的高率である。しかし日常生活を支える福祉制度として、障害者福祉等のサービスを介護保険と併用している実態は見えてこない (図 17)。

また問題関心領域では医学的問題は 20 年前に 3 割だったものが 5 割近く担ってきている。その上昇につれて家族や介護の問題をさらに大きくしていると考えられる。家族や介護問題 2 割、福祉サービス問題 7~8%、住居・経済問題 6~7%と割合としては変化の内容は個別性の高いであるため、量的対応よりも質的な個別対応への力を必要とすると考え (図 18)。

D. 考察

高齢化が進むことによって、家族介護から社会介護へ向かう流れが加速している中で、社会福祉・介護サービスのニーズが増加して行くことが予想される。しかしスモン患者の要介護度の分布を見ると、一般の要介護高齢者の要介護度の分布に比べ、要介護 4 及び 5 の重度が少なく、要介護 1~2 が多い傾向が見られる。一方身体障害者手帳は、スモン患者のほとんどが 1~2 級を所持している。介護保険の申請率も 10%ほど高い。このことから、高齢化により障害者支援制度より介護保険の使用を優先される状況、介護保険の入所基準が重度要介護者に向いており、スモン患者の中でしめる割合の高い要支援や要介護 2 までのスモン患者についてとくに、介護保険等の社会サービスの利用に不利益が出ないように注視していく必要がある。

E. 結論

今年度の概況を振り返り、高齢化により福祉・介護

ニーズが増加して居ることが推察されたが、しかし在宅サービスおよび特養などの公的施設のサービスにつながりにくい状況を把握した。今後も福祉・介護のフェルトニーズおよびノーマティブニーズを掘り起こしながら、スモン患者の生活に対する不満や不安に答えていく手法を開発する必要がある。また入院入所のニーズが高まることから、スモン患者さんの制度的特典を知ってそれを生かした入転院支援が可能になるような支援者への研修や周知を行う必要も考えられる。

G. 研究発表

1. 論文発表

- ・ 田中千枝子 (2017) 「2016 年度学会回顧と展望 ~ 保健医療部門」『社会福祉学』 Vol 58-3 pp 164-179 社会福祉学会
- ・ 田中千枝子 (2018) 「2017 年度学会回顧と展望 ~ 保健医療部門」『社会福祉学』 Vol 59-3 pp 158-174 社会福祉学会
- ・ 二本柳覚 田中千枝子 (2018) 「高齢化したスモン患者の生活実態及び課題に関する調査研究」『日本福祉大学社会福祉論集』第 139 号 pp 61-77 日本福祉大学

2. 学会発表

なし